関係予期が未知の他者への自己情報公開を規定する要因に与える影響

—入力情報数に着目して—

○太幡直也¹ 佐藤広英²

(¹ 常磐大学人間科学部・² 信州大学人文学部)

キーワード：自己情報公開、関係予期、情報プライバシー

Effects of expectancy of future interaction on factors affecting disclosure of personal information to stranger

Naoya TABATA¹ & Hirotsune SATO²

(¹Tokiwa University, ²Shinshu University)

Key Words: disclosure of personal information, expectancy of future interaction, information privacy

インターネット（以下、ネット）では、自己情報を他者に公開し、未知の他者とコミュニケーションすることが可能である。しかし、自己情報の公開の仕方によっては、望まない他者から繰り返し連絡を受けるなどの迷惑行為の被害に遭いやすくなる可能性があると考えられる。未知の他者への自己情報公開を規定する要因を検討すると、過度な情報公開を抑止するための知見が得られると期待される。

自己情報公開を規定する要因の一つとして、本研究では、情報プライバシー（自己情報を他者に伝達しようと思う程度）に着目する。太幡・佐藤（2013）は、ネット上での情報プライバシーを測定する MPS-I（佐藤・太幡, 2013）を用い、ある自己情報へのプライバシーが低いと、その情報をソーシャル・ネットワーク・サービ上で多くの他者に公開していることを示した。このことから、情報プライバシーの低さが未知の他者への自己情報公開を促すと予測される。

一方、インターネットでは、コミュニケーションする他者と、一回限りではなく、その後の関係が予期される場合もある。対人関係の調整のために、自他のプライバシーの境界が調整される（e.g., Petronio & Durham, 2008）ことから、関係予期がある場合、自己情報公開への情報プライバシーの影響が弱まる可能性が考えられる。そこで、自己情報公開を規定する要因として、相手とコミュニケーションすることへの期待（以下、コミュニケーション期待）にも着目する。関係予期の高い他者に対してコミュニケーション期待が高いと、自己情報を開示する調整を行おうとするため、コミュニケーション期待の高さが自己情報公開を促すと予測される。

本研究では、未知の他者とチャットを行う前に自分のプロフィール画面を作成する状況を設定する。そして、プロフィール画面にある情報への入力情報数に着目する。

方法

調査対象者 大学生 67 名（男性 17 名、女性 50 名、平均年齢 20.64±1.31 歳）に個別に実験を実施した。

実験計画 関係予期（高、低）の実験参加者間 1 要因計画であった。関係予期高条件では、チャットする他大学の相手と、後日、実際に会って話してもらう予定であると教示した。低条件では、上記の教示は行わなかった。

手続き 学生同士が初めてやりとりするときの特徴に関する研究であるとの教示の下、他大学の学生と 10 分間、パソコンでチャットしてもらう旨を説明した。そして、チャット前に、パソコン画面上で相手に示すプロフィールを作成してもらうと告げ、示したい情報のみ入力するように求めた。入力画面は佐藤・吉田（2008）を基に作成し、8 項目と顔写真の合計 9 情報を表示する欄があった。8 項目は、MPS-I（佐藤・太幡, 2013）を基に、名前、住所、性別、年齢、家族構成、性格、生活パターン、悩み事とした。その後、質問紙に回答するように求めた後、デブリーフィングを行った。

質問紙の構成 (a) MPS-I（佐藤・太幡, 2013）の、自

伝的情報（e.g., 過去の出来事）、属性情報（e.g., 性別）、識別情報（e.g., 本名）に 4 件法で回答するように求めた（ $\alpha=.77 \sim .88$ ）。(b) コミュニケーション期待 4 項目（e.g., チャットするのが楽しみである）（ $\alpha=.77$ ）、関係予期認知 2 項目（e.g., 相手と今後、直接会う可能性があると思う）（ $r=.65, p<.001$ ）に 5 件法で回答するように求めた。あてはまるほど得点が高くなるように得点を算出した。

結果と考察

関係予期認知は、高条件（ $M=2.57, SD=0.92$ ）の方が低条件（ $M=1.89, SD=0.76$ ）よりも高かったため、実験操作は有効であったと考えられる。また、プロフィール画面の 9 情報の入力数は、高条件（ $M=6.29, SD=1.82$ ）の方が低条件（ $M=5.30, SD=1.59$ ）よりも多く（ $t(65)=2.37, p<.05$ ）、表出性も、高条件（ $M=2.44, SD=1.12$ ）の方が低条件（ $M=1.83, SD=1.07$ ）よりも高かった（ $t(65)=2.30, p<.05$ ）。一方、コミュニケーション期待（ $M=3.20, SD=0.72$ ）には差はみられなかった（ $t(65)=0.90, ns$ ）。

続いて、関係予期の条件ごとに、性別（男性=1、女性=2）、年齢、MPS-I の各因子、コミュニケーション期待を説明変数、情報入力数を目的変数とした重回帰分析を行った。結果を Table 1 に示す。分析の結果、関係予期によって、未知の他者への自己情報公開を規定する要因に違いがみられた。すなわち、低条件では、識別情報へのプライバシーが低いほど情報入力数が多かった。したがって、相手との関係予期がないと、自分を特定できる情報にプライバシーを感じないほど未知の他者に自己の情報を公開しやすいと解釈される。一方、高条件では、コミュニケーション期待が高いほど情報入力数が多かった。したがって、相手との関係予期があると、情報プライバシーの影響が弱まると解釈される。今後は、上記の結果を踏まえ、未知の他者への過度の情報公開を抑止する具体的方策を検討していくことが期待される。

Table 1

説明変数	情報入力数を目的変数とした重回帰分析	
	関係予期	
	低条件 ($n=33$)	高条件 ($n=34$)
	β	β
性別	.08	.02
年齢	-.17	.19
自伝的情報	.11	.37
属性情報	.18	-.22
識別情報	-.70***	-.26
コミュニケーション 期待	.08	.50**
R^2_{adj}	.29*	.28*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$.

注) 本研究の実施にあたり、常磐大学人間科学部の石沢友紀さん、篠原唯さんに協力いただきました。記して感謝いたします。